人生音痴

生方たつゑ

人生音痴

生方たつゑ

著者略歴

三重県宇治山田市生まれ。日本女子大学家政科卒業。昭和10年頃今井邦子に師事。「明日香」の選者を経て「国民文学」に入社。昭和38年「浅紅」を主宰。昭和33年歌集「白い風の中で」で第9回読売文学賞受賞。趣味は古美術鑑賞，能。現在，サンケイ新聞，随筆サンケイ，毎日新聞，婦人公論，主婦の友の選歌担当。

著書に歌集「浅紅」「雪の音譜」「火の系譜」ほか。入門書に「短歌の作り方百科」ほか。随筆集「急がない人生」がある。

人生音痴

定価 550円

昭和44年5月1日発行

著者 生方（うぶかた） たつゑ

発行者 田村 彬

印刷 凸版印刷株式会社

製本 株式会社 昇栄社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一ノ七（103）

大阪・北区梅田町二七（530）

〈検印省略〉 © Printed in Japan

目次

春の川　5
夏の灯　89
秋のきつね　143
冬の音　211

装幀・宮崎和子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人生音痴

のろしのような炎あこがれて生きし日もやさしかりにき花びらみれば

おりおりに食い違いたる一世きていままぼろしす赤き花がた

「人生音痴」に寄せて

春の川

川のりと美也の結婚
ふき味噌・ぎだゆう鏈詰
あらしをふく
草だんご閑話
春の芽の匂い
菜の花季
藜の思い出
熊と蕗のとう
春の川
花屑
野鳥ざんげ
泡をふく
放庵先生
中西先生の風土
生きた花を
くじらの夢
呼子
心に花を咲かせよう
ひな祭りの宵
ぎぼし

川のりと美也の結婚

「川のりが採れましたんで、ちょっぴりですけれどお届けに上がりました」

美也さんはそのような口上をのべたあとで、おもむろに風呂敷包みをとき、中から弁当箱のお惣菜入れにつめた青いみずみずしい川のりを私の前に差出してくれた。

「雪しろがあまり入りすぎてからじゃ駄目なんです。ちょうど三月のまだ水のさし切れないうちが、一番キメのこまかい味わいをもってましてね」

そのような微妙な食べものが利根川の支流を西に入った赤谷川にあるということも私には不思議だったけれど、そのあり場を一体どのようにして探知したのかということが知りたかった。

「知ってるのはうちの父だけなんです」

川のりは二杯酢でたべるのだが、これを食べたら海のりは、雑駁であらい味になるとその父親が断定する。稀少価値もさることながら、あの気むずかしげな父親の顔が私に浮かぶ。今のよう

に生産物が殆んど機械化され、インスタント化されたときに、人知れず匂っているこのような幽かな、貴重な「生物」のあることも、赤谷川のたった一カ所にしかないということを知って自ら採取に出かける一途な人間のあることも奇妙な時代のとり合わせに思えてならないのだった。

私はその美也さんがもってきてくれた川のりを、古伊萬里のふかい鉢のまん中にこんもりと移し入れた。

美也さんの家は〇〇大尽といわれた豪家であった。彼女の父はその何代もつづいた大尽の家をまたたくまに没落させた。大尽あそびの末のこと、と世の常例を歩いていったまでなのだが、気位は捨て切れずわがままで、一途、従って衣食住も没落しながら、なかなかびんぼう落ちは出来なかったらしい。美也さんはその父に仕込まれて少しは俳句をかじり、没落しても昔の衿持を捨てぬ気性がはっきり見えた。それだけに私は美也さんを見ると、没落しつつある家に肩を張りながら生きねばならぬあわれさが胸にあふれてくるのだった。

卑下されまいとする心の張りが、美也さんの若さに反撥した。したがって美也さんは次第に婚期を逸していった。

「帯に短かし、たすきに長し」

などという諺などでは解決出来ないものが、美也さんの凛々しい若さをさびしいものにしてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ったのかもしれぬ。

「いくら落ちぶれても、あんまりな所へなど嫁ぎたくないんです。それよりはひとりでいた方が……」

彼女は家と運命をともにしても悔いない誇りをもっているかに見えた。だが、彼女のこの満たされない孤独な考え方が果して、いつまで彼女を支えてゆけるであろうかとひそかに案じたりした。村人たちは彼女のことを「半狂女」と名づけて陰口をたたいていたようだった。しかし彼女は狂女じみたところなど少しもないばかりか、村には珍らしい知識人であり、彼女は「川のり」のように特殊な女にはちがいなかった。暇を見ては読書した。矛盾だらけの村の生活や、思索の足りないくらしに満たされることもないまま一生を閉じてゆく村びとたちの生き方に彼女は彼女なりに腹を立てた。

川のりを私に届けにきてくれた時期に、彼女はこのような心の動機や、世間への反撥など一杯抱えこんでいたらしい。父でなければ「川のり」は採れないんです、といったそのつよい断定の仕方の中にも、私は美也さんのそういわねばいられない何かがあったことをうすうす感じとっていたのだが。

しかし彼女はそれを境(きょう)にして川のりを届けに来る事はなかった。

村役場のAさんがある日訪ねてきて、彼女が結婚したことを教えてくれた。
「東京へでも出たんですの、あの人の性格なら、かえって人生経験が豊かになるし、頭もいいし、毛並みも一層よくなるでしょうからね」
私はすっかり東京へ出たこととばかり思って彼女の人生を祝福した。川のりばかり大事にしなくったっていい、と思った。
「いいえ、それがね、大変な奴と結婚しちゃったんです」
「大変な奴って、一体何なのよ、矢張り人間？」
私は相手を冷やかしながらきき返すと、相手は気の毒そうに、
「それが、あの村の山奥の無学な炭焼男なんです」
「へえ――」
「だが、結構、幸せだといってるそうですよ」
美也の誇りを捨てさせるほどの相手を私は一度見たいと思った。無学で、山奥で炭焼業をしている彼女の夫とはどういう人間像をもっているのであろうか。「川のり」が稀少価値をもっているように、あるいはその炭焼きの男が美也には運命的なものを感じさせる稀少価値をもっていたのかも知れぬ。

ふき味噌・ぎだゆう鑵詰

ほかほかと脳の組織がたるんできそうな、あたたかい四月のある摘み草の一日。

「こんちは。どこへおいでやんしため」

すれ違うときにどちらかが山よりの土手に身を寄せなければならないような細いみちだったから、この見知らぬ人からこえをかけられると、厭でも相手の顔を見ないわけにはゆかない。

「太郎山まで、蕗の薹とりに」

「へえ——、ふうきのとうでござんすかい。御苦労さんだ。町のてい（者という意味？）はそんげなもの珍らしいかめ」

そこら一面の土手っぷちに生えてるものがそのように珍らしいのか、といった驚きとあたたかい軽蔑とをふくめた会話を私はきいた。

「蕗が出た。つくしがのびた。やれ蓬が、などと一々驚いていたんでは、わしどもの生命はいく

つあっても間に合いませんわい」

というようなことを口の中で独りごちたようにも取れた。深い皺がきざまれてはいたが、その皺の流れがいかにも温和でこの老人の顔をあたたかくした。日灼けした皮膚のたくましさにも敵意は感じられなかった。

太郎山から下ればすぐ温泉があって、そこへゆくのだという。私に山疲れのあとの湯を浴びるのも悪い筈はないという。

村の温泉場というものは、全く物識りが知識を披露する場になっている。ラジオやテレビの世界では洩らしてしまうような事までが、ここでは重要なニュースにもなる。四月という月は事が多い。

「町のお観音様のお祭りに皆さんゆきやんしたかい？。えらい賑いでめ」

「へえー、よくおいでやんしため」

「サーカスもありやんしたが、昔とは変ったもんです」

さっき道であった老人が、この辺では物識りの部と見え、町へ出たときの様子を話してきかせる。この老人、一同を少しの間みまわし、そしてお湯の出口の方へ歩いてゆき、ぷるんと顔を手拭でひとなでした。これからが面白いんだという構えを、私はこの素朴な老人の顔からよみとる

と、ひとり湯槽のすみに背をもたせてじっと沈んだ。

「わしが話すことは皆にはわかりなさらんにちげえねえ」

念をまず押し、

「わしどもが若けいころのことでございすが、みなさん、ぎだゆうの鑵詰のこと知ってなさるかい。まったくあのぎだゆうの鑵詰は素晴らしかったもんでしため」

私は背を湯ぶねの縁によりかからせていたので、何かのきき違いではなかろうかと思った。何かの鑵詰のことなのだろう。だが一同は感心したようにこの老人の話にひき入れられている。そこで馬鹿げた顔をして、私が湯の隅からこえをかけた。

「それ、何のかんづめのこと?」

「ぎだゆうのかんづめ、おめえさま義太夫知ってなさるべい。それの鑵詰でさあ」

私は狐につままれたようにぽかんとしたが、相手は至極真面目、まわりの聴手もうたがいの目をしたのは一人もいない。

「それ何するものなの?」

とまた馬鹿な質問を重ねた。そうさせるような興味をそそる顔を、老人は私に向けてきたからである。

「あんた方は蓄音機なら知ってますべい。それが初めて日本へきたときの代ものを、わしはこの目で見、耳できいてきたもんだめ。ああ、まったく素晴らしいものでしたな。今のステレオなんぞよりわしはおったまげましただ」

湯がざぶざぶと波を立ててざわめき、人々は急にがやがやと饒舌はじめた。そうだ、そうだ、誰さんの家へはじめて機械が運ばれてきた時には大きなラッパをつけていたっけ、などというこえもきこえた。

まったく「いきのいい漫談」をききながら、作意があっては到底及びもつかない言葉の発見をこの人々がしているのに驚嘆した。

「義太夫の鑵詰」

とはよくいったものだし、よく考えたものだ。素朴でからだでわしづかみにしてきたこの言葉の、何と新鮮で豊かなことか。

摘んだ蕗の薹をきざんで味噌にまぜ、日本紙で挾んで焼く蕗味噌くらいなら、私にも出来そうだ。あの老人の珍妙な鑵詰談義のようなふくみは到底出来ないにしても、この手で掘り、この指でむしりとってきた土の中の蕗の薹の味は、春のフレッシュな生命力の勁さを、あの味が示してくれる筈である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com